

## ■活動レポート

## 被災した生物標本の救出と復元

専門学芸員 鈴木まほろ（生物部門）

津波に襲われた陸前高田市立博物館の建物内部を埋め尽くす瓦礫と土砂。その撤去を、市職員と県内博物館・文化財関係者が協力して進め、やっと収蔵庫の資料が取り出せるようになった時には、大地震から6週間が経っていました。10万点以上の収蔵資料の中には押し葉標本もあると聞いていましたが、きっとカビにまみれてボロボロだろう、あきらめるしかない、そう思っていました。



陸前高田市博の収蔵庫の状況(4月15日撮影)

ところが、運び出され積み上げられた押し葉標本の状態は、予想よりずっと良好でした。1枚ずつ丁寧にビニール袋に入れられ、積み重ねられていたため、天井まで海水に浸かったにも関わらず、濡れなかった標本がたくさんあったのです。

また、その貴重さにも驚愕しました。1万点を超える標本の大部分は、岩手の博物学者・鳥羽源蔵が明治～昭和初期に採集したものでした。古い標本はそれだけで歴史的な価値がありますが、明治期の三陸沿岸で採集された標本など、他にはまず存在しません。当時の著名な植物研究家が採集し、鳥羽源蔵に送ったものも目を引きました。己の不明を恥じるのみですが、陸前高田市博にこれほど貴重なコレクションがあったことを、私はその時初めて知りました。

標本の半数は泥水で汚れ、すでにカビが生えているものもありました。汚れた標本は一刻も早く塩分と泥を落とし、再

乾燥させる必要があります。

1点でも多く救わなければと、ひとまず当館にすべて運び込みましたが、とても1館で処理できる量ではありません。幸いにも地震直後から、遠方の博物館の方々から「あの標本はどうなった」「何かあれば手伝うよ」といった連絡を次々に下さっていました。そこで思い切って、標本の洗浄を依頼するメールを全国各地にいる植物担当学芸員の方に送りました。反応は大変素早く、わずか1週間のうちに、汚れのひどい標本約6,000枚をすべて送り出す目途が立ちました。



車庫に運び込んだ押し葉標本

一方当館では、標本を送り出す準備に追われました。ビニール袋の外側にこびりついた泥を落とし、汚れの程度によって標本を分別。汚れのひどいものには、カビを抑えるためエタノールを噴霧しました。標本番号を控えた後で袋に入れ、1箱に100枚ずつ詰め込み、最終的には

北海道から九州まで計29ヶ所に75箱を送り出しました。この作業には約3週間を要しましたが、多くのボランティアの方が急遽駆けつけて下さったおかげで、なんとか完了することができました。

現在当館では、残りの標本約7,500点の処理や、きれいになって戻ってきた標本の整理を行っています。押し葉の他にも、蘚苔類500点・昆虫2万4千点などの標本を預かり、各地の博物館等施設で復元作業をしていただいています。各館それぞれに試行錯誤で標本の洗浄方法を確立し、ウェブサイトやメールで情報を発信してくれた所もあります。

博物館学芸員の仕事は多岐にわたりますが、やはり資料を守ることが第一の責務と言えます。この経験を通して、改めてその責任の重さをずっしりと感じました。その重さを即座に理解し、分けもって下さった各地の学芸員の方の存在が心の支えとなりました。

当館では、陸前高田に博物館が再建される日まで、復元された標本を安全に管理しつつ、専門家による学術的な評価を行い、その成果を発信していくことも、今後の重要な課題と捉えています。

被災した博物館や当館に、様々な形で御協力下さっている方々に対し、改めて心からの感謝を申し上げます。



車庫で行われた標本の送り出し作業